

9000年前の漁撈民

—賈湖遺跡の漁撈についての試論—

張 居中*・程 志杰*・中島 経夫**

* 中国科学技術大学科技考古系

** 岡山理科大学生物地球学部生物地球学科

(2014年6月20日受付、2014年11月6日受理)

摘要

河南省の舞陽賈湖遺跡は中国新石器時代前期の重要な遺跡で、1983年から2001年までの間に、7回にわたって発掘調査が行われた。賈湖遺跡から発見された多くの遺構や遺物の中には、漁撈活動と関係する遺物が沢山ある。漁撈活動は人間の最も古い生業活動の1つである。賈湖集落周辺の広い面積を持つ湖沼と豊かな水産資源は、人々が継続して漁撈活動に従事するのに良い環境を作り上げたと考えられる。本稿は賈湖遺跡の気候条件、漁撈具、漁撈対象などを研究することによって、当時、賈湖遺跡に暮らしていた人々の漁撈とその発展レベルを明らかにする。更に、本研究を通して漁撈は当時の社会経済において重要な意義を擁していただけではなく、当時の社会生活と精神生活とも密接な関係を持っていたことを指摘する。

1 はじめに

河南省の舞陽賈湖遺跡は中国新石器時代前期の重要な遺跡である。黄淮海大平原南西部周辺の淮河上流地域に位置し、中位と高位段丘面の移行域に立地している。地理座標は東経113°40′、北緯33°36′で、海拔は67mで、面積は55,000m²あまりで、文化層の厚みは1~2mである。1983年から2001年までの間に、河南省文物考古研究所、中国科技大学科技史与科技考古学系などの機関が7回にもわたって発掘調査を行った。発掘面積は全部で2700m²。住居址数10基、窯跡10数基、貯蔵穴数百基、墓数百基が発見された。また土製、石製、骨製などの各種遺物も1,000点以上出土した。さらに、8000年前の7音階の骨笛、亀甲と原始契刻文字、および最古の稲作などの重要な発見もあった。更に、10数年来、多分野にわたる総合的研究が行われ、その研究成果が公表されると、中国内外で広く関心が集まったことにより、2000年には、「20世紀の重大な考古学的発見100選」に挙げられた。

2 賈湖遺跡の古環境

賈湖遺跡は9000年から7700年前の新石器時代文化の遺跡で、3つの文化期から構成されている。賈湖遺跡が営まれた時代は、ちょうど完新世の温暖期後期と最温暖期前期に相当する。気候は温暖湿潤で、降雨量も多かった。遺跡は、河川の氾濫原に立地する。西側には、海拔68.6m、遺跡との比高差1~1.5mの低丘陵がひろがる。東側には、遺跡との比高差1~1.4mの広い窪地がひろがり、現在は遊水池になっている。現在の賈湖は古昆水の旧河床である。賈湖遺跡東側の完新世の地層中に黒色の河成堆積層があり、西から東へと次第に厚く堆積している。厚さは、その周辺では0.30~0.50m、遊水池の中心では地層の厚さは3m以上にもなり、深さは分かっていない(河南省文物考古研究所、1999)。完新世の最温暖期に、賈湖遺跡が立地する地域では比較的大きな面積の水域が存在していたことを示している。

遺跡中から、シカ類の遺存体と鏃などの狩猟具が大量に出土したことから、周囲には広大な草原が広がっていたと推測される。また、大量の魚骨、淡水生二枚貝類、カメ、スッポン、ヨウスコウワニ、タンチョウ、ヒシ、ハス、ミズワラビなどの水生の動植物遺存体が遺跡のいたるところから出土したことから、当時この地域は比較的大きな面積の水域が存在していたことが分かる。稲作に関する遺物の出土からも、この地域には比較的豊富な水資源があり、また気候も温暖であったことを裏付けている。

遺跡の東側約1kmの範囲内は、地勢がやや低く、窪地につながる。当時は沼沢景観が広がっていたはずで、漁撈には理想的な環境であったと考えられる。遺跡から1km離れると急に傾斜が増し、さらに1~2m低くなり、海拔高約65mとなる。最も低いところで63.4mである。地層断面の観察から、河成堆積層も明らかに厚くなっており、当時の水深が比較的深かったことを裏付けている。現在の窪地の面積から推計すると、100 km²以上に達する。このことから、漁撈活動ができる範囲は、かなり広がったことが分かる。

上記の分析結果から、賈湖遺跡周辺の自然環境は非常に良好で、食料資源と生産道具の原材料の資源も豊富であったと言える。さらに、温暖湿潤で多雨な気候、大規模な水域の存在は、漁撈活動を可能にし、その発展にも有利に働いたと考えられる。

3 賈湖遺跡の漁撈

賈湖遺跡では漁撈関連遺物や水生動物の遺存体が多く出土し、当該遺跡の漁撈研究に豊富な資料を提供した。これらの資料から、賈湖遺跡の人々にとって漁撈は、不可欠で重要な位置を占めていたと言える。

(1) 漁撈具

賈湖遺跡では大量の生産関連遺物が出土していることから、経済構造を解明するのに有益である。表1について、以下のように説明できる(张, 2007)。

①第一類の道具は、錘、台、穿孔具、研磨器や砥石などの加工具などがある。

②第二類の道具は、おもに生産や日常生活に直接用いる道具を指す。これは主に農具、狩猟具、漁撈具、加工具や日常生活に関する道具に分けられる。

加工具の数量が最も多いが、さまざまな器種が含まれている。磨盤、磨棒などの穀物加工具、石斧、片刃石斧、石鑿、骨鑿などの木工具、紡錘車、針などの紡績・裁縫具のほか、匙形器、削器、骨板などの用途不明の道具もある。これらはすべて日常生活に使用する道具と考えられる。骨板類の道具もおそらく紡績具に属するものであり、手工業的な加工具に含めて統計を取った。

生産活動の道具は、農具、狩猟具、漁撈具の大きく3つに分類した。表2はこれらの道具ごとに統計をとったものである。

道具の材質から見ると、骨製品の数量が最も多く土製品の数量が最も少ない。当然、土製品は主に生活用具として用いられ、石製品は主に加工具として用いられている。鏃や銛などの狩猟具や漁撈具は、主に骨製であることから、骨製品の比率が高い。賈湖遺跡出土の生産道具は、漁撈具が25.1%を占め、骨製銛が主流である。土製漁撈具にはわずかに漁網錘があるが、石製漁撈具はない。

a. 骨製銛

骨製銛とは、投げて突き刺す漁撈具の一種である。127点出土しており、漁撈具の82.5%を占める。賈湖遺跡での主要な漁撈具と見なすことができる。漁撈具の形態から推測される漁撈対象魚類の体格は比較的大きいと考えられる。報書に記載されている349基の墓の副葬品を見ると、骨製銛は42点あり、すべての墓の12%から出土していることになる。漁撈は、日常的な生業であったことが分かる。

表1 生産道具別の統計表。河南省文物考古研究所(1999)より

材質	第一類の道具	第二類の道具					合計	比率 (%)
		農具	狩猟具	漁撈具	加工具と生活道具	その他の道具		
土製			5	28	64	1	98	5.3
石製	217	161	27		300	82	787	42.3
骨製・角製・牙製		1	283	132	541	17	974	52.4
合計	217	162	315	160	905	100	1859	
比率 (%)	11.7	8.7	16.9	8.6	48.7	5.4		100

表2 生産道具の分類と統計表 河南省文物考古研究所(1999)より

材質	農具	狩猟具	漁撈具	合計	比率	
土製			5	28	33	5.2
石製	161	27		188	29.5	
骨製・角製・牙製	1	283	132	416	85.3	
合計	162	315	160	637		
比率	25.4	49.8	25.1		100	

骨鉞は第1期では27点出土し、第2期では81点に増加し、第3期では19点と減少した。横断面の形状には、隅丸方形（図1-1）、菱形（図1-2）円形（図1-3）、楕円形（図1-4）、U字形あるいはV字形などがある。基部の形状には、円錐を呈すもの（図1-5）あるいは円柱状のもの（図1-6）、一側面が削られた後、磨かれ凹溝状を呈し、もう一面が円弧あるいは稜線を呈し、そして横断面が半円形や三角形を呈するもの、器体の一側面が凹溝を呈するもの（図1-7）、基部に細かな刻線が施されているもの（図1-8）、先端が大きいものも多く、細長く鋭利である。両翼は線対称で、逆刺が多く施されているA型（図1-9～11）、翼がなく基部に形状が円錐状を呈するB型（図1-12～14）は出土数が最も多い2類型である。

これらの鉞は、柄の固定方法から3つに分類することができる。1つ目は「挿入式」で、鉞先の基部を鉞柄の端に差し込むものである。2つ目は「紐結式」で、鉞先の基部を鉞柄に縛って固定するものである。最後の3つ目は「一体式」で、鉞先と鉞柄が一体となっているもので、実際には鉞先の基部が長くなりそのまま柄となったものである。「挿入式」と「一体式」の先端両側には逆刺が付いている。おおむね精緻に製作されていることから、これら道具が重視されていたことが分かる。

b. 漁網錘

漁網錘は漁網に用いられるものであるが、出土数は28点と少ない。漁撈具に占める割合は17.5%で、第2期に6点の出土があり、第3期には22点まで増加する。鼎足を再利用して製作されており、重さは比較的軽い。計測した資料のうち、100g以下のものが92%を占め、100g以上のものは8%を占めるのみである。このため、網自体はあまり大きくなく、中型・小型魚類を捕獲できさえすればよかったと推測できる。第3期の漁網錘の出土数が増加するのは、賈湖遺跡の後期になると投網が漁撈方法のひとつとして用いられていたことを示している。総じて、鉞による漁撈方法は主要な方法であり続け、大型・中型魚類を捕獲対象としていた。しかし、省力

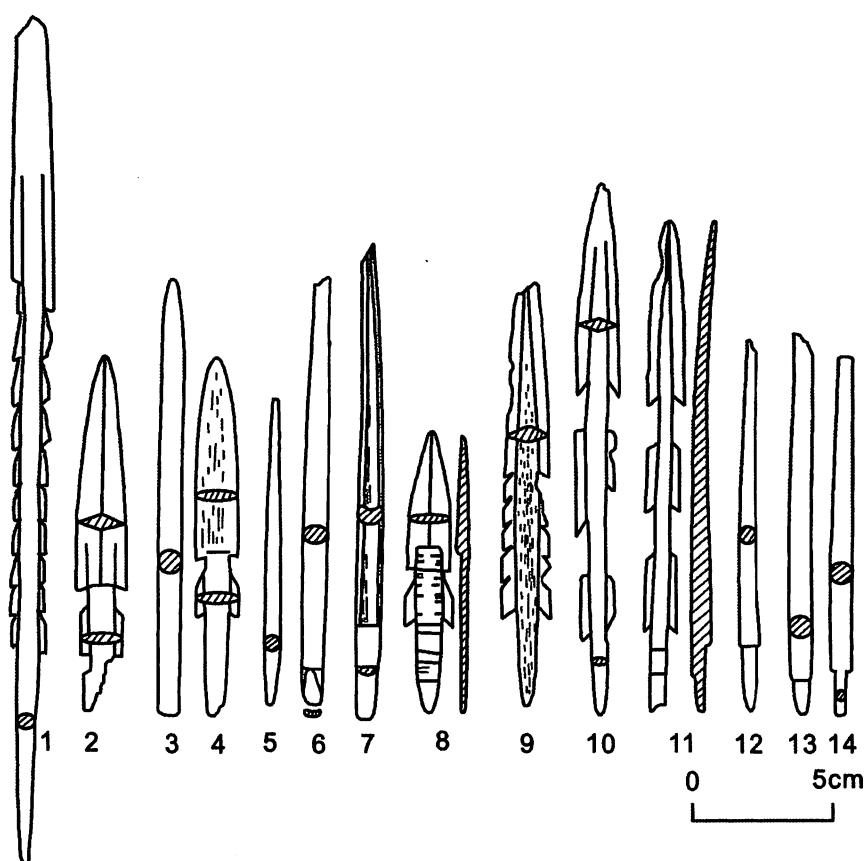


図1 賈湖遺跡から出土する骨製鉞。河南省文物考古研究所（1999）より抜粋

化もできる網漁撈は第2期以降、徐々に増加する傾向にある。このことから、異なる対象魚類によって異なる道具を用いていただけでなく、漁撈技術も徐々に進化したと考えることができる。

第7次発掘調査において、同時期の墓地が3か所から発見されている。そのうち、2か所の墓地で漁撈具が主要な副葬品を占め、ほかの1か所の墓地では農耕関連道具が主な副葬品であった（来苗ほか、2009）。

出土状況から述べると、漁撈具の出土数から得られる漁撈の比率はバイアスがかかっている。出土した漁撈具は、数千年の間、残存した一部分にすぎない。大量の竹、木や繊維で編んだ道具は、地中での条件によっては保存がされにくかった可能性がある。実際、賈湖遺跡は水生生物の資源が豊富な時期に営まれており、淡水棲二枚貝、巻貝などの大量の捕獲活動は、こうした道具を用いて行われたと考えられる。カメヤスッポンなどの爬虫類の捕獲には、現在でもそれらの生態や習性を熟知して行われるものである。こうした観点も加味することにより、出土資料からの分析は漁撈の全体的な議論になる（張、2007）。

(2) 漁獲対象

賈湖遺跡の周囲は広い範囲で水辺が存在し、当時の気候が温暖で多雨であったこともあり、水生資源は非常に豊富であった。賈湖遺跡出土の動物遺存体は、貝類、魚類、爬虫類、鳥類、哺乳類の5類に分かることができる。遺跡各期の各動物遺存体の出土数と比率は表3の通りである。

この表から、魚類の出土数が最も多く、遺跡各期で60%以上を占めていることが分かる。次に多いのが哺乳類である。そのほかの出土数と比率はどれも比較的少ない。魚骨とカメ、スッポンの骨が大量に出土したことは、これらが主要な捕獲対象であったことを示している。

表3 出土動物遺存体の数量と構成比率 『賈湖遺跡7次発掘出土動物遺存報告』より

種類	1期		2期		3期	
	数量	比率	数量	比率	数量	比率
軟体動物	7	0.10%	8	0.13%	1	0.02%
魚類	4827	69.16%	3874	62.80%	3698	76.03%
爬虫類	679	9.73%	323	5.24%	329	6.76%
鳥類	206	2.95%	46	0.75%	99	2.04%
哺乳類	1260	18.05%	1918	31.09%	737	15.15%
合計	6979	100%	6169	100%	4864	100%

a. 魚類

『舞陽賈湖発掘調査報告書』(河南省文物考古研究所、1999)によると、多数の灰坑から大量の魚の肋骨、脊椎骨や咽頭歯が出土している。賈湖遺跡出土の魚骨は総計12,398点で、すべての出土動物骨に占める割合は68.82%である。賈湖遺跡第1期から第3期の魚骨出土数はすべての動物遺存体のなかで、第1期：69.16%、第2期：62.80%、第3期：76.03%の比率である。魚骨の数量はほかの動物遺存体よりも増えていった。咽頭歯の総数は1,171点で、コイ属 *Cyprinus* とフナ属 *Carassius* からなるコイ亜科 *Cyprininae* が最も多く、ソウギョ属

表4 賈湖遺跡から出土した文化期毎の咽頭骨(歯)遺存体

	第1期	第2期	第3期	合計
Barbinae バルブス亜科	0	3	3	6
<i>Barbinae</i> , gen. et sp. indet. バルブス亜科属種不明	0	3	3	6
Leuciscinae ウグイ亜科	38	112	21	171
<i>Ctenopharyngodon</i> ソウギョ属	27	65	15	107
<i>Mylopharyngodon</i> アオウオ属	11	46	6	63
<i>Elopichthys</i>	0	1	0	1
Cultrinae クルター亜科	2	46	7	55
<i>Cultrinae</i> , gen. et sp. indet. クルター亜科属種不明	0	6	4	10
<i>Megalobrama</i>	1	38	2	41
<i>Culter</i>	1	1	1	3
<i>Cultrichthys</i>	0	1	0	1
Cyprininae コイ亜科	90	725	81	896
<i>Carassius</i> フナ属	3	21	4	28
<i>Cyprinus</i> コイ属	87	704	77	868
合計	130	886	112	1128

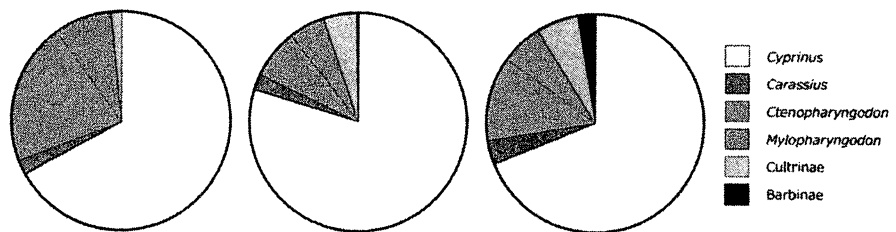


図2 第1期から第3期における咽頭骨(歯)遺存体の構成

*Ctenopharyngodon*とアオウオ属 *Mylopharyngodon* からなるウグイ亜科 *Leuciscinae* が次いで多い。その他にメガロブラマ属 *Megalobrama* などからなるクルター亜科 *Cultrinae*、バルブス亜科 *Barbinae* が続く(表4)。文化層毎の構成比を図2に示す。図2からわかるようにコイ属の占める割合が非常に大きく、この中には幼魚の咽頭歯が多数含まれている。

また、魚骨の数量は哺乳類の3倍にもなる。魚類遺存体と哺乳類遺存体を出土総数で比較すると、数量では魚類が優勢となる。魚骨は頭骨等の癒合が弱く、骨格が分解しやすいことから、魚骨の数量が多いことが誇張されやすい点は注意すべきである。食肉の供給量では、中型哺乳類一頭は中型魚類の何倍にもなる。しかし、魚類の脊椎骨が大量に出土していることは、客観的にも魚骨の数量が優勢であると言える。

大量の魚骨の出土は、当時の魚類の消費が相当な量であったことを証明している。そして、同時に対象魚の漁撈活動も相当に活発であったことも示している。こうしたことから、賈湖遺跡において、漁撈が顕著な経済活動のひとつであったと強調できる。

b. 爬虫類

爬虫類の出土数は多いが、種類は少なく、カメ、スッポンとヨウスコウワニの3種類だけである。

カメとスッポンは非常に多く、出土状況とその保存状態から次の2つに分類することができる。一つは、墓から出土し、多くは背甲と腹甲、あるいは腹甲のみのものである。そのうち、背甲と腹甲は背腹がすでに分離しているが、復元すると上下が組み合わさり、もともと一一体であったことを示している。このような資料が20数点出土した。腹甲のみのものは、腹甲は完形かほぼ完形のもので、背甲は欠損しているか、ひどく破損しているかしている。このような資料は、30数点出土した。このほか、灰坑あるいは廃棄された住居跡から出土した資料に多くのスッポンがある。すべて破片で食後に遺棄されたものと考えられる。これらのカメとスッポンの甲羅から同定すると、カメ類にはセマルハコガメ *Cuora flavomarginata* やハナガメ *Ocadia sinensis* と同定不能のもの、そしてスッポン *Pelpldiscus sinensis* が出土している。このほか、重要な捕獲対象にヨウスコウワニ *Aligator sinensis* がある。灰坑や住居址から10数個体分の骨格が出土した。幼年もあれば成年もある。骨片には人工的な二次加工の痕跡があるものもある（河南省文物考古研究所，1999）。こうしたことは、これらの爬虫類が遺跡付近で捕獲されたもので、外から持ち込まれたものでないことを示している。

c. 軟体動物

そのほかの捕獲対象には淡水棲二枚貝、巻貝などの軟体動物がある。貝殻の出土数も多い。残念なことに、保存状態が悪く、多くの灰坑や文化層中で腐敗し白色化して粉末状になった貝類が見られた。しかし、貝殻を粉碎したものを混和材として混入した土器が多く出土したことは、軟体動物を捕獲することが賈湖遺跡の日常的な生産活動であったことを示している。

賈湖遺跡では、同定に耐える軟体動物が30数体出土した。2科6属の計14種が同定されている。淡水棲二枚貝の内容は、イシガイ科 *Unionidae* のイシガイ *Unio douglasiae* と未同定種、クサビイシガイ属の（江西楔蚌）、*Cuneopsis capitata*、クサビガイ *Cuneopsis heudei* と未同定のもの、ガマノセガイ属の *Lamprotula bazini*、*Lamprotula tortuosa* と未同定のもの、ササノハガイ属の *Lanceolaria gladiola*、トンガリササノハ *Lanceolaria grayana* と未同定のもの、シジミ科のタイワンシジミ *Corbicula fluminea*、さらに同定することができない大量の巻貝片も出土している。

4. 漁撈と社会生活

(1) 漁撈：賈湖の人々の重要な生業

『舞陽賈湖発掘調査報告書』（河南省文物考古研究所，1999）では、生産道具の出土数にもとづき、経済構造について分析を行っている。分析結果から見ると、生産道具は大きく3つに分けている。そのうち、農具が162点あり、全

体の25.4%を占める。狩猟具は315点あり、同じく49.5%、漁撈具は160点あり、同じく25.1%を占める（表1、表2を参照）。3期を通して生産方法ごとの生産道具を比較検討することで、それぞれの文化期の経済構造の状況と変化の傾向をより有効に観察することができる。

表5および図3を見ると、農具の比率は小さい。出土数が比較的多い例えば石斧や石製の磨盤、磨棒などを木工用道具や加工具として統計をとったために、もしこれらを農具類に入れるとすると、農具の比率はさら

表5 各文化期における各生産道具の統計

	農具			狩猟具			漁撈具			合計
	土製	石製	骨製	土製	石製	骨製	土製	石製	骨製	
第1期		4			1	27			27	59
第2期		39		2	15	199	6		81	342
第3期		118	1	3	11	49	22		19	223
合計	0	161	1	5	27	275	28	0	127	624

に高くなるかもしれない。また、竹製や木製の道具は日常的な生産道具や生活道具でもあり、もしこれらの道具を含めると、農具の比率はさらに高くなると思われる。出土数から見ると、狩猟具と漁撈具はかな

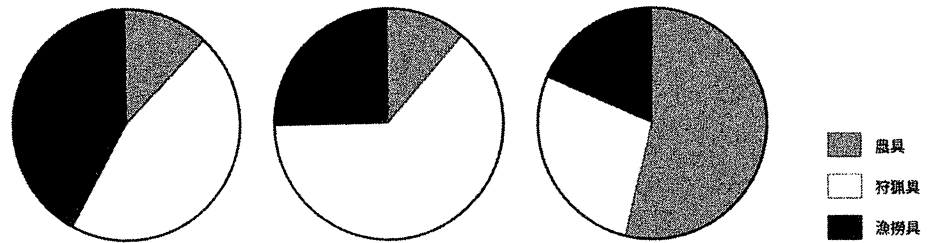


図3 第1期から第3期における各生産道具の比率。来茵ほか(2009)より

り出土しており、第1期では狩猟と漁撈の地位はほぼ同等であったと思われるが、第2期では、狩猟具の出土数は漁撈具の2倍になり、農具の出土数の5倍以上となる。狩猟は主要な生業であり、その地位すでに無視できないものとなっていた。賈湖遺跡では数回の発掘調査において、大量の動物遺存体が出土しており、哺乳類、鳥類、爬虫類、魚類などが同定されている。豊富な動物資源は狩猟や漁撈のために有利な条件を提供したのである。第3期になると、狩猟具の出土数はだいたい第2期の3分の1、漁撈具の出土数は第2期の2分の1、農具の出土数は第2期の3倍になる。この比率の変化の傾向は、第1期から第3期の各生産道具の比率に明瞭にあらわれている。各種道具を時期ごとに比較すると、狩猟具の比率は第1期と第2期では増加傾向にあり、第3期では減少する。漁撈具の比率は第1期では比較的高い比率を占め、第2期と第3期には減少傾向にある。ただ農具の出土数はずっと増加傾向にある。道具の種類と出土数の変化から、人々の狩猟と漁撈への依存はすでに前期や中期ほど高くなく、徐々に農業と家畜飼育へと移行していったのである。

以上に述べたことをまとめると、第1期から第3期から出土した生産道具は、第1期、第2期が狩猟と漁撈が主で、農業が補助的な経済類型を示し、第3期になると、農業は相応に発展し、狩猟や漁撈を越える比率にまでなる。生産道具の総量、動物遺存体、植物遺存体の総合的分析の結果からすると、賈湖遺跡は、採集、狩猟が主で、農業と家畜飼育が補助的な広範囲経済であった。しかし、農業経済の比率は徐々に増加したのである。これからすると、漁撈は賈湖の人々の重要な生業の一つであったと言える。

第7次発掘調査において、3か所で同時期の墓地が発見されている。そのうち2か所では主に漁撈具が副葬され、もう一か所では主に農具が副葬されていた。この現状は当時の経済構造、社会分業などを研究するのに重要な示唆を提供し、遺跡後期に複数の社会単位が異なる生業形態であったことを示している。

各動物遺存体の出土数と比率を比較すると、動物性食物はおもに漁撈活動に依存していたことが分かる。家畜飼育は補助的な手段にすぎず、飼育活動はすべての動物性食物の獲得においては二次的な位置であった。このほか、貝類や爬虫類の捕獲、哺乳動物の狩猟活動も盛んであり、そのなかでもカメ、スッポンは高い比率を示している。また、特殊な遺構に埋納されているものもあった。カメ、スッポンが賈湖遺跡の経済活動において、重要な役割を果たしていたのである。

(2) 賈湖遺跡の人々にとっての亀文化

賈湖遺跡では相当数のカメとスッポンが出土した。カメやスッポンの甲羅などは、廃棄物とされる遺物には多く含まれ、また多くの灰坑や文化層中でも見られた。これだけでなく、食後の残った甲羅を加工して、原始宗教の道具にしたのである。墓中の副葬品には、カメの甲羅に石を入れて、甲羅の表面に符号を刻んだものがある。賈湖遺跡では、亀文化が形成されたと考えられる。こうした文化現象は、長期的なカメの捕獲と食用、そして亀崇拝の活動の結果、徐々に形成されたのである。漁撈は賈湖の人々の心のなかに神聖な地位を有したのだろう。

賈湖遺跡の社会共同体の構造については、現在まだ解明されていないが、賈湖社会の信仰は自然環境と生業とに密接に関係する。規則的に埋葬された大量のカメは亀崇拝の存在を表し、その信仰はトーテミズム的な崇拝の段階にあったとされる(张, 2007)。これはカメと人々の生活が密接であっただけに、長い関係のうえによりやく可能になったのである。長期的にカメを食し、カメを利用し、カメを崇拝したことで、亀甲刻文字が生み出された。大量に副葬された鏃や銛などの狩猟具や漁撈具は、環境に適応した生業であることを直接反映している。賈湖遺跡の最も特色ある亀甲文化と鳥笛文化は、数千年の中国史のなかで、その基礎的な役割を担ったのである。これらは賈湖遺跡周囲の特定の自然環境と関係があり、特色ある思想文化は賈湖遺跡の人々が自然環境に順応し利用する過程であった。

The fishing people of 9000 years ago

— A discussion on fishing in the Jiahu site —

Zhang Juzhong*, Cheng Zhijie*, and Nakajima Tsuneo**

*Department for the History of Science and Scientific Archaeology,
University of Science and Technology of China
Jinzhai Road 96, Hefei, Anhui 230026, China

** Department of Biosphere-Geosphere Science, Faculty of Biosphere-Geosphere Science,
Okayama University of Science,
1-1 Ridai-cho, Kita-ku, Okayama 700-0005, Japan

(Received June 20, 2014; accepted November 6, 2014)

The Jiahu site is an important archaeological site (7000 to 5700 B.C.) dated to the early Neolithic period, Peiligang Culture, divided into three cultural periods. It is located about 22 kilometers north of Wuyang, in southwestern Henan Province, China, on the east slopes of Fuliu Mountain. The site's importance lies in its established early data and dates for pig domestication, rice domestication, musical instruments, fermented beverages and writing. Additionally, the large freshwater system had spread around the site of those days under a wet climate, and fishery was thriving. So a large amount of cyprinid remains are unearthed from this site. We consider that freshwater fishing was an important subsistence at that time. Based on the present study, it is pointed that for the Jiahu people fishing was not only important in social economy, but also was related to spiritual life and social life at that time.

Keywords: Jiahu site; China; Neolithic Age; fishery; fishing gears; cyprinids; fishing culture.

5 おわりに

賈湖遺跡の漁撈についてまとめると、以下のように言うことができよう。

1. 漁撈の規模はすでに大きく、生業経済に重要な地位を占めていた。
2. 漁撈方法は、主に銛による漁撈で、第二期に漁網錘が出現する。網漁撈という効率の良い漁撈方法は後世に出現した新しい方法で、その後、徐々に増加していった。
3. 漁撈具は主に骨製の銛である。土製の漁網錘は少なく、すべて鼎形土器の脚部を転用したものをを用いている。
4. 捕獲対象は主に魚類で、次いで軟体動物や爬虫類である。
5. 漁撈と精神生活との関係は密接である。

賈湖遺跡の人々は 9000 年前の漁撈民として、漁撈を発展させただけでなく、漁撈文化をうみだした。賈湖集落の恵まれた気候と自然環境は、こうした漁撈とその文化にとりわけ恵まれた自然条件を提供したのである。漁撈経済が経済全体において占める割合は、賈湖文化後期になってある程度下降するが、漁撈はひきつづき重要な役割を担っていた。漁撈経済は、亀崇拜を出現させることになり、この文化現象は周囲の地域に重大な影響を与えることになる。賈湖文化の創始者は優秀な漁撈民、狩猟民、工芸民、中国最初の農民、そして優秀な音楽家でもあった。

謝辞

愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センターの榎林啓介博士には、中国語の翻訳をしていただいた。本研究は中国国家自然科学基金資助項目（資助号：40772105）および JSPS 科研費 22401002 および 26300004 の助成を受けた。

参考文献

- 河南省文物考古研究所 1999：『舞阳贾湖』科学出版社
- 张居中 2007：「论贾湖遗址的环境与生业」『裴李岗文化发现 30 周年学术研讨会』，科学出版社 119-135 頁
- 来茵・张居中・尹若春 2009：「舞阳贾湖遗址生产工具及其所反映的经济形态分析」『中原文物』2009 年第 2 期 22-28 頁
- 罗运兵・袁靖等：「贾湖遗址第七次发掘出土动物遗存研究报告」『贾湖遗址第七次发掘报告』，科学出版社（印刷中）